

『平家物語』における平教経の兄弟 — 菊王の死をめぐる —

長谷川 靖子

一、はじめに

平教経は並はずれた戦闘能力と勇猛さを兼ね備え、巻八の「水島合戦」では敗戦続きの平氏軍を勝利に導くとともに、八島合戦、壇ノ浦合戦にいたっては義経と対決する人物である。平家随一の武将として登場する教経は、清盛の弟教盛の子息で、巻九「小宰相身投」で知られる小宰相の夫通盛の弟にあたる。

教経はこれまで、その登場が合戦場面のみに限られ、また武勇の将としての造形が目立つために、典型化された理想的武人像とだけ捉えられがちで、その内面に目を向けられることはなかったように思われる。

確かに常に勇猛果敢で、ひるむことなく敵に向かっていく教経だが、その一辺倒とも言える教経造形の中で、唯一彼が勇猛さ以外の感情を見せている場面がある。すなわち、巻十一「嗣信最期」である。ここでの教経は、童・菊王の討死を受け、戦闘中にもかかわらず戦いをやめてしまうのだが、この教経の在り様の変化は見過ごすことのできないものではなからうか。そして、そこに兄通盛の存在が関わっている。

(一) 教経に関する一の谷戦死記事と先行研究

ここで、平教経や「嗣信最期」に関する先行研究を確認しよう。平教経に関する研究は決して多いとは言えない（兄の通盛についてはさらに少なく、巻九「小宰相身投」で知られる妻・小宰相に関する論の中にその名が見える他は、謡曲「通盛」に関する論がわずかにあるくらいである）。そしてその研究は、『吾妻鏡』『玉葉』に見える、一の谷での教経戦死記事を中心に、あるいはそれを踏まえて分析や考察がなされてきたといえよう。すなわち、『吾妻鏡』寿永三（一一八四）年二月七日条には一の谷合戦の経緯が記されているが、討ち取った平家の人々について、

越前三位^{通盛} 到^二湊河辺^一。為^三源三俊綱^一被^二誅戮^一。其外薩摩守忠度朝臣。若狭守経俊。武蔵守知章。大夫教盛。業盛。越中前司盛俊以上七人者。範頼。義経等之軍中所^二討取^一也。但馬守前司経正。能登守教経。備中守師盛者。遠江守義定獲^レ之云々。（注1）

と記述され、さらに十三日条には、

十三日壬申。平氏首娶_二源九郎主六条室町亭_一。所謂通盛卿。忠度。経正。教経。敦盛。師盛。知章。経俊。業盛。盛俊等首也。

そして十五日条には、範頼、義経等の飛脚が鎌倉に到着した合戦記録を献上し、

通盛卿。忠度朝臣。経俊。已上三人。諸君者討二取之一。経正。師盛。教経。已上三人。遠江守護討二取之一。敦盛。知章。業盛。盛俊。已上四人。義経討二取之。

此外梟首者一千余人。凡武藏相模下野等軍士。各所_レ竭_二大功_一也。追可_二注記言上_一云々。

と伝えたことが見える。『吾妻鏡』によれば、教経は一の谷で戦死したことになるのである。

また平安末期から鎌倉初期の政局の真相を詳述した、九条兼実の日記『玉葉』においては、寿永三（一一八四）年二月十九日条に次のように記されている。

：伝聞、平氏帰_二住讃岐八島_一、其勢三千騎許云云、被_レ渡之首中、於_二教経_一者一定現存云々、又維盛卿三十艘許相卒指_二南海_一去了云々、又聞、資盛貞能等、為_二豊後住人等_一乍_レ生被_レ取了云々、此説、日来雖_二風聞_一人不_二信受_一之处、事已実説云々、：（注2）

「渡さるる首の中、教経に於いては一定現存すと云々」という記事が、渡された首の中に教経がいたと述べているのか、あるいは

は教経がこの時点でなお現存（生存）していたと述べているのかは、今なお解釈の分かれるところである。しかしながら長い間、前者の解釈が定説であった。

そうして、これら『吾妻鏡』と『玉葉』での記事から、史実における平教経は一の谷合戦で討死したものと考えられ、したがって、

能登守教経は、度々のいくさに一度も不覚せぬ人の、今度はいかが思はれけん、うる黒といふ馬に乗り、西をさいてぞ落ち給ふ。播磨国明石浦より舟に乗って、讃岐の八島へ渡り給ひぬ。
（②巻九「坂落」二二二頁）

との『平家物語』における叙述は、史実から離れたものとされてきた。一の谷で討たれたはずの教経が、『平家物語』においては一の谷合戦後も物語の中に生き続けるからである。一の谷合戦に敗れ八島に渡った教経は、八島合戦、壇ノ浦合戦で義経を討とうと奮戦し、巻十一「能登殿最期」での壮絶な最期を迎えるが、そうした一の谷合戦以降の教経の活躍のすべてが、物語による創作性の極めて強いものとされてきたのである。

以上を背景に、教経の先行研究においては一の谷以降の教経について、「物語のなかでもっとも史実を離れて活躍する虚構のなかの人物」として捉えられがちであった。

（二）看過されがちであった「嗣信最期」における教経

そのような中で、鈴木淳一氏は、教経を傑出した武将として印

象づけるために、物語において様々な手法が用いられていることを指摘している（注3）。すなわち、『保元物語』『平治物語』の為朝・義平と『平家物語』の教経の間に近似の部分が認められることに着目し、「合戦における典型的な英雄像」として教経が造形されていると結論づけておられる。しかし、そのように結論づけるからこそ、教経という人物については、

第二に教経には一門とともに滅び去る運命にありながら、そこにいささかの敗北感も伴わないのも留意すべきであろう。つまり教経像全体を通してその造形のあり方は、力感溢れる武将像になっているのである。これを例えば木曾義仲の最後と比較してみると明らかである。栗津における「木曾殿最後」の義仲の述懐は人間的な嘆声をじかに聞くが如く、哀感をそそらせるが、教経からは遂にその愁訴の声の断片をも聞くことができない。…（中略）…僅かに侍童の菊王丸を討死させた時に愁嘆の心をのぞかせるが、これは弓矢とる身の哀れともいふべきもので、義仲の悲嘆とはおのずから異なる性質のものであろう。

のように、木曾義仲と比較して「典型化され抽象化された理想的武人像」しか見出すことができないとされ、「嗣信最期」における教経の在り様の变化についても、「弓矢とる身の哀れ」で片づけてしまっておられる。

また伊藤幸恵氏は、教経がそのような典型的英雄として造形されている理由について、「彼が誰と、どのような構図の中に配されているか」に注目することにより、教経を『平家物語』の構想の

中で位置付けておられる（注4）。すなわち、平家一門の中にあつて武勇の氣風を残す門脇家の出であることを背景に優れた武将として登場し、さらに「教経をして壇浦で義経と対峙させようとする『平家物語』の構想」の下、傑出した武将として造型されるにいたつたのだと指摘している。いずれも重要な指摘だが、「嗣信最期」の菊王の討死に対する教経の反応については、

巻第九で示された教経対義経の構図は、巻第十一に至つてより鮮明なものとなる。それは「嗣信最期」の章段で、教経と菊王丸、義経と嗣信という二組の主従関係の対照により表されていると考えられよう。…（中略）…そして覚一本ではさらに菊王丸を失つた心痛を「あまりにあはれ」と、教経をして初めて戦いに対する意気込み以外の感情を表出させている。兄通盛の死への悲しみをも感じさせ、一の谷を経た教経の心境の深化をうかがわせる場面であらう。

のように、「一の谷を経た教経の心境の深化をうかがわせる場面」と言及するにとどまつており、むしろここでは、教経と義経の將軍としての在り方の対照を見出しておられる。

以上のように、『平家物語』における教経は「典型的な」人物としてその人間性や内面を見出そうとはされてこなかったし、「嗣信最期」における教経についても、これまでの研究において看過されがちであつた。そしてそれは、先に述べた、一の谷合戦以降の教経が虚構性の極めて高い人物として位置付けられてきたからに他ならないであらう。

先学の示してこられた、一の谷以降の教経に関する虚構性を否

定しようという気は毛頭ない。しかし、教経がどのように物語によって意図的に創造されたのだとすれば、そこに描かれる彼の人間性や内面には『平家物語』の表現する重要な何かが見出されるはずではないだろうか。『平家物語』における教経は、単純に「典型的な」という型にはまるような人物では決してないはずだ。

本稿では、平教経を捉える上で最も重要な場面として、この巻十一「嗣信最期」を取り上げる。菊王が射抜かれるのを見た教経の行動にはどのような意味があるのか、そして教経にとって菊王の死が何を意味するのか、教経と兄通盛の兄弟に着目して読み解いていきたい。

なお本稿では、『覚一本』を中心テキストとしてそれと主要な諸本間の異同を考慮しながら考察を進める(注5)。考察対象とする諸本は、語り本系では『屋代本』『百二十句本』、読み本系では『四部合戦状本』『延慶本』『長門本』『源平盛衰記』とする(注6)。

二、「嗣信最期」における教経の特異性

巻十一「嗣信最期」は八島に押し寄せた義経軍と教経との対決の場面である。義経軍にまんまと内裏を焼かれてしまった平家の総大将の宗盛は、「能登殿はおはせぬか。陸へあがって一いくさし給へ」(②巻十一「嗣信最期」三五一頁)と、武勇を誇る教経に戦闘を命じる。宗盛直々の指名に勇ましく応えた教経は、義経軍に押され気味の平家一門の中で圧倒的存在感を発揮し、「王城一の強弓、精兵にておはせしかば、矢さきまにはまる者、射とほされずといふ事なし」。(②巻十一「嗣信最期」三三三頁)と評され、その戦闘能力の高さが際立つ章段である。

なかにもまっさきにすすんだる奥州の佐藤三郎兵衛が、弓手の肩を馬手の脇へつと射ぬかれて、しばしもたまらず、馬よりさかさまにどうどおつ。能登殿の童に菊王といふ大力の剛の者あり。萌黄威の腹巻に、三枚甲の緒をしめて、白柄の長刀の鞘をはづし、三郎兵衛が頸をとらんとはしりかかる。

佐藤四郎兵衛、兄が頸をとらせじとよッびいてひやうど射る。童が腹巻のひきあはせをあなたへつと射ぬかれて、大居に倒れぬ。能登守これを見て、いそぎ舟よりとんでおり、左の手に弓をもちながら、右の手で菊王丸をひッさげて、舟へからりと投げられたれば、かたきに頸はとられねども、いた手なれば死ににけり。

(②巻十一「嗣信最期」三三三頁)

教経は義経をねらって矢をかまえるも、奥州の佐藤兄弟をはじめとする家臣たちが楯となって立ち塞がる。右に挙げたのは、矢面に立った鎧武者たちが次々と射落とされる中、真つ先に進み出した佐藤三郎兵衛嗣信がとうとう射抜かれてしまう場面である。

「三郎兵衛が頸をとらんと」、教経の矢に射抜かれた嗣信の首をとるために走り寄ったのが教経に仕える童・菊王であり、それを見た嗣信の弟の佐藤四郎兵衛忠信は、「兄の頸をとらせじ」と渾身の矢を放つ。忠信の矢が見事命中して、倒れる菊王のもとに、「いそぎ舟よりとんでおり」と、今度は教経が船から飛び降りて駆けつけ、菊王の体を自軍の船へと投げ入れる。ここではまず、教経の行動が注目される。

敵軍の大将義経を打ち取ろうと矢を射ていた教経が、「いそぎ舟よりとんでおり」と、戦闘そっこのけで菊王のもとに走り寄ると

いうのは、教経らしくない行動——すなわち、これまでの教経描写とは全く異なる行動といわざるをえない。というのも、先行研究においても常に指摘されてきたように、本場面以前の教経はその登場面において、平家軍にあつては異質なまでに常に勇ましく、どんなときでも怯むことなく戦闘に臨んできた人物として描かれてきたからである。

教経のこれまでの登場面を見ると、その活躍により勝利した水島合戦において教経は、

平家の方の大手の大將軍には新中納言知盛卿、搦手の大將軍には能登守教経なり。能登殿宣ひけるは、「いかに者共、いくさをばゆるに仕るぞ。北国のやつばらにいけどられむをば、心憂しとは思はずや。御方の舟をばくめや」とて、千余騎が艫綱、舳綱をくみあはせ、中にむやひをいれ、あゆみの板をひきわたしひきわたしたいれば、舟のうへは平々たり。
：（中略）：源氏の勢、大將軍はうたれぬ、われさきにとぞ落ち行きける。平家は水島のいくさに勝つてこそ、会稽の恥をば雪めけれ。
（②巻第八「水島合戦」一三〇〜一三一頁）

傍線部に見られるように、「いかに者共、いくさをばゆるに仕るぞ。」と言ひ放つ。

また源氏になびく諸国の軍勢を、教経が次々と討つていくさまが描かれる巻九「六ヶ度軍」では、

：門脇の中納言、子息越前の三位、能登守、父子三人、備前国下津井にましますときこえしかば、討ち奉らんとて兵船十

余艘で寄せたりけり。①能登守これを聞き、「にくいやつ原かな。昨日今日まで我等が馬の草きつたる奴原が、すでに契を変ずるにこそあんなれ。其儀ならば一人ももらさずうてや」とて、小舟どもに取乗つて、②あますな、もらすな」とてせめ給へば、四国の兵者共、人目ばかりに矢一つ射て、のかんとこそ思ひけるに、③手いたうせめられ奉つて、かなはじとや思ひけん、遠負にして引き退き、都のかたへにげのぼるが、
：（中略）：城郭を構へて待つところに、④能登殿やがておし寄せ責め給へば、一日たたかひ、賀茂冠者打死す。淡路冠者はいた手負うて自害してンげり。能登殿、防矢射ける兵者ども百卅余人が頸切つて、討手の交名記いて、福原へ参らせらる。：（中略）：⑤能登守これを聞き、やがて讃岐の八島を出でておはれけるが、：（中略）：又淡路国の住人安摩の六郎忠景、平家にそむいて源氏に心をかよはしけるが、大舟二艘に兵糧米、物具つうで、都の方へのぼる程に、能登殿福原にてこれを聞き、小船十艘ばかりおしうかべておはれけり。安摩の六郎、西宮の興にて、かへしあはせふせぎたかふ。⑥手いたうせめられ奉つて、かなはじとや思ひけん、引退きて和泉国吹飯の浦につきにけり。：（中略）：⑦能登殿やがてつづいてせめ給へば、一日一夜ふせぎたかひ、安摩の六郎、園部の兵衛、かなはじとや思ひけん、家子郎等に防矢射させ、身がらはにげて京へのぼる。能登殿、防矢射ける兵者ども二百余人が頸きりかけて、福原へこそ参られけれ。：（中略）：能登殿、「今はうつべき敵なし」とて、福原へこそ参られけれ。大臣殿をはじめ奉つて、平家一門の公卿殿上人寄りあひ給ひて、能登殿の毎度の高名をぞ一同に感じあはれける。

（②巻第九「六ヶ度軍」一八九頁―一九三頁）

傍線部①、「其儀ならば一人ももらさずうてや」、また傍線部②、「あますな、もらすな」などと言いつつ教経の姿を確認することができ。また傍線部③④では、教経に攻められる敵方の心内を推量する地の文として「手いたうせめられ奉ッて、かなはじと思ひけん」が繰り返され、さらに傍線部⑤、「能登守これを聞き、やがて讃岐の八島を出でておはれけるが」、傍線部⑦「能登殿やがてつづいてせめ給へば」と、即行動の破竹の勢いで突き進む教経の戦闘の様子が見える。

これまで平家に付き従ってきた人々が次々と源氏になびく中で、教経は滅亡を食い止めようと必死に奮戦する。スピードと猛攻を信条とし、謀反の輩がいるとあらば即戦場に向かい、容赦なく討伐していくというのが教経の戦闘姿勢であると考えてよいだろう。また、鶴越のふもとをまかされた際には、

兄の越前三位通盛卿相具して、山の手をぞかため給ふ。山の手と申すは鶴越のふもとなり。通盛卿は能登殿の飯屋に北の方むかへ奉ッて、最後のなごり惜しまれけり。①能登殿大きにいかッて、「此手はこはい方とて、教経をむけられて候なり。誠にこはう候べし。②只今も上の山より源氏さッとおとし候ひなば、とる物もとりあへ候はじ。たとひ弓をもツたりとも、矢をはげずはかなひがたし。たとひ矢をはげたりとも、ひかすはなほあしかるべし。ましてさ様にうちとけさせ給ひては、なんの用にかたせ給ふべき」といさめられて：

（②巻第九「老馬」二〇一頁）

と、兄通盛が飯屋で北の方である小宰相との最後の名残を惜しんでいるのに対し、「能登殿大きにいかッて」と、教経が兄に怒りをぶつける場面も見られる。いつ敵が攻めてくるかもしれない状況下ではいつでも戦闘に入れるよう体勢を整えておくべきだ、と諫める教経の言動からは、ひとたび合戦に身を置いたら妻への愛情などという私的な感情に振り回されるべきではない、との彼の信念を読み取ってもよいであろう。教経は戦場において、容赦なく、そして油断なくどこまでも戦闘に没頭する武将として登場しているのである。

そんな教経が、義経という宿敵を目の前にしながら、戦闘をそっちのけにしてまで童一人の首を守ったりするだろうか。教経のこのような行動は初めてであるし、これ以降も全く見られない。

巻十一「嗣信最期」における教経の行動は、武勇に優れた武将の典型像とされる教経の、特異なありかたを示す唯一のものとして、決して見過ごすことはできないのである。

三、兄の遺した存在

菊王が射られるのを見て、教経が戦いを中断して思わず飛び出したのは、菊王が彼にとって特別な存在であったからに他ならない。すなわち以下のように語られる。

これはもと越前の三位の童なりしが、三位うたれて後、おととの能登守につかはれけり。生年十八歳にぞなりける。この童うたせてあまりにあはれに思はれければ、其後はいくさも

し給はず。

〔②巻第十一「嗣信最期」三五四頁〕

菊王はもともと、一の谷で討たれた教経の実の兄・越前三位通盛に仕えていた童であつたのだ。兄の死後、弟の教経のもので召し使われていたのである。

では、教経と兄通盛はどのような兄弟だったのだろうか。ここで教経と兄通盛との関係性について、それぞれの登場場面を確認してみよう。それぞれの登場面を追おうとすると、都落ちで登場して以来、彼ら兄弟はほとんど行動を共にしていることがわかる。特に兄の通盛に関しては、その生前において、弟の教経がともに登場しないのはその最期が描かれる場面のみである。

義仲軍入京の知らせにより各所に平家軍が配置された際には、

大將軍には、新中納言知盛卿、本三位中将重衡卿、都合其勢三千余騎、都を立てまづ山階に宿せらる。越前三位通盛、能登守教経、二千余騎で宇治橋をかためらる。左馬頭行盛、薩摩守忠度、一千余騎で淀路を守護せられけり。

〔②巻七「主上都落」六二頁〕

のように、通盛・教経兄弟で共に宇治橋を守っている。また、都落ちする際には、

落ち行く平家は誰々ぞ。前内大臣宗盛公、平大納言時忠、平中納言教盛、新中納言知盛、修理大夫経盛、右衛門督清宗、本三位中将重衡、小松三位中将維盛、新三位中将資盛、越前三位通盛、殿上人には、内蔵頭信基、讃岐中将時実、左中将

清経、小松少将有盛、丹後侍従忠房、皇后宮亮経正、左馬頭行盛、薩摩守忠度、能登守教経、武蔵守知章、備中守師盛、淡路守清房、尾張守清貞、若狭守経俊、兵部少輔尹明、藏人、大夫業盛、大夫敦盛、僧には、二位僧都全真、法勝寺執行能円、中納言律師忠快、…〔②巻七「一門都落」八六頁〕

右に見られるように、都落ちした平家の一人として、共にその名を連ねており、（その他の人々もだが）共に都落ちしている（ちなみにここには点線部に示したように、下の弟たち——業盛と忠快の名も確認することができる）。

また、教経が平氏への反抗勢力討伐に活躍する様を描く、巻九「六ヶ度軍」では、

…①門脇の中納言、子息越前の三位、能登守、父子三人、備前国下津井にましますときこえしかば、討ち奉らんとて兵船十余艘で寄せたりけり。…（中略）…門脇の中納言、其より福原へのぼり給ふ。②子息達は、伊予の河野四郎が召せども参らぬをせめんとて、四国へぞ渡られける。先づ兄の越前三位通盛卿、阿波国花園の城につき給ふ。能登守讃岐の八島へわたり給ふと聞えしかば…

〔②巻九「六ヶ度軍」一八九〜一九〇頁〕

と、父・門脇の中納言教盛と通盛・教経の父子三人で姿を見せている。さらに、「子息達は伊予の河野四郎が召せども参らぬをせめんとて、四国へぞ渡られける」と語られ、彼ら兄弟は父と一旦離れ、反抗勢力を討つべく共に戦いに向かっている。平氏一門への反抗

勢力を残らず駆逐せんとする、教経の剛勇さが全面に押し出されている場面ながら、そこには兄通盛も確かに同行しているのである。

さらに一の谷合戦においても、

大臣なのめならず悦びて、越中前司盛俊を先として、能登殿に一万余騎をぞつけられる。兄の越前三位通盛卿相具して、山の手をぞかため給ふ。山の手と申すは鴨越のふもとなり。

(②巻九「老馬」二〇〇頁)

「兄の越前三位通盛卿相具して」と、共に鴨越のふもとを守っている。

一方で通盛・教経兄弟には他に、藏人大夫業盛と中納言律師忠快という二人の弟がいるが、僧である忠快はもとより、業盛も先程挙げた都落ち以降、合戦に参加しながらも別行動をとっている(注7)。一の谷での合戦に参加しつつも鴨越のふもとを固めていた通盛・教経とは行動を別にしており、同じ場に描かれることはないのである。

同じ兄弟の中でも通盛と教経は共に描かれ、同じ経験を共有する。通盛・教経兄弟は共に死線を潜り抜けた兄と弟として、強いつながりを持った描かれ方をしていると解せられるのである。

*

先程兄の通盛について、その生前において弟の教経とともに登場しないのはその最期が描かれる場面のみであると述べた。ここですその場面を確認してみよう。以下が通盛の最期の場面である。

越前三位通盛卿は、山手の大將軍にておはしけるが、其日の装束には赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧着て、黄河原毛なる馬に白覆輪の鞍おいて乗り給へり。内甲を射させて、敵におしへだてられ、おとと能登殿にははなれ給ひぬ。しづかならん所にて自害せんとて、東にむかつておち給ふ程に、近江国住人佐々木の木村三郎成綱、武藏国住人玉井四郎資景、かれこれ七騎がなかに取りこめられて、つひにうたれ給ひぬ。

(②巻第九「落足」二四一頁)

一の谷合戦において、通盛は先に触れたように教経と山手を守っていたのであった。しかし、深手を負い自害せんと落ち延びようとしたところを源氏軍七騎に取り囲まれて討たれてしまったという。

ここでは「おとと能登殿にははなれ給ひぬ。」と、教経と離れたことが通盛の「しづかならん所にて自害せん」という行動の大きな要因となっている点が注目される。他の諸本を見ると通盛の死は次のように記されている。

《百二十句本》

兄越前三位通盛は、近江の国の住人、佐々木の木村の源三成綱といふ者に、七騎が中にとり籠められて、つひに討たれ給ひけり。

《四部合戦状本》

越前三位通盛は、湊河の尻にて、七騎有る敵に執り込められて討たれたまひぬ。宮田滝口時員と云ふ者、告げ奉りて、「打輪の旗を差し候へば、児玉党と見候へども、『近江国の住人佐

々木次郎成綱』と名乗り候ふ」とぞ申しける。

《延慶本》

門脇中納言教盛ノ嫡子、越前三位通盛ハ、一谷被破ニケレバ、磯ヘ打出給タリケレドモ、船ナカリケレバ、只一騎渚ニソイテ、東ヘ向テ歩給フ。湊河ノ下ニテ近江国住人佐々木源三盛綱七騎追テカ、ル。三位取テ返シテ、主人ト覺シキ者ニ目カケテ馳向ケルヲ、佐々木ガ郎等、三位ノ甲ニ熊手ヲ投懸テ「エイ」と云テ引ヘタリ。三位ノ甲切ニケリ。押並テ引組テドウド落ツ。上ニ成リ下ニ成リ一時計取コロビケルヲ、佐々木ガ郎ヲサ、レケレドモ切レズ。佐々木ガ郎等、三位ノ鎧ノ引合ヨリ太刀ヲ左右ヘ指チガヘテ、ウツヲニクリナシケレバ、三位ヨハリ給タリケルヲ頸ヲ取ル。佐々木ガ郎ハナカラ計ゾ切タリケル。佐々木ヲキアガリテ、三位ノ頸右ノ手ニサゲテ、弓杖ツキテ、フトコロヨリタ、ウ紙ヲ取出シテ、頸ノ血ヲノゴフ。アケニ成テゾミヘケル。三位ノ軍兵アマタ其数有ケレドモ、一谷ニテカケヘダテラレテ、散々ニナリニケレバ、宮太滝口時員ト云侍、三位ノ跡ヲ尋テ追テ参リケレドモ追ツカズ。三位被打給テ後、追付タリケレドモ、頸ハナシ。ムクロヲミルニ、モヘギニヲヒノ鎧ノ引合セニ、秘藏シテ持給タリケル笛ヲ指レタリ。

《源平盛衰記》

『延慶本』に源三成綱の経歴と、組み合う通盛と成綱の会話が加わったところ。

『百二十句本』においては「兄越前三位通盛は、近江の国の住人、佐々木の木村の源三成綱といふ者に、七騎が中にとり籠めら

れて、つひに討たれ給ひけり。」、また『四部合戦状本』では「越前三位通盛は、湊河の尻にて、七騎有る敵に執り込められて討たれたまひぬ。・・・」とあるように、これら二本においては簡略に通盛が討たれたことを記すのみである。

一方、『延慶本』は通盛の奮戦を詳細に語る。『源平盛衰記』は『延慶本』に敵の源三成綱の経歴と、取っ組み合う通盛・成綱の会話を加えたかたちをとるが、長文のため引用を控えることとする。

いずれにせよ、どの諸本にも『覚一本』に見られる「おとと能登殿にははなれ給ひぬ」のような、弟教経への通盛の意識は見えないのである。

刑部久氏は通盛討死場面における、このような諸本間の異同について次のように指摘している（注8）。

（執筆者注：通盛討死場面における）『覚一本』と広本系の最大の相違点は、両傍線部に見る如く、通盛討死の際に、（能登殿）との距離の存在を語るか否かの中にある。すなわち、『延慶本』での通盛は、一人の独立独歩の武将なのであつて、有土越中前司盛俊や薩摩守忠度ばりの闘いの描写が置かれた後の、堂々たる武人の死を死んでいる。そこには《教経》と離れ離れになつてしまつたことに原因とするような弱気は微塵も感ぜられぬのである。湊河の下で、源三盛綱七騎に追いつかれた際も、直ちに取つて返して只一騎馳向かつたではないか。に對して、『覚一本』では（しづかならん所にて自害せん）との通盛の意志決定には（おとと能登殿にははなれ給ひぬ。）という事情が重要な因子として強力に働いている。教経との

乖離が、とりも直さず己の運命の極まりを決定づけるものであるということを貴公子通盛は観念したが如き描写なのである。

氏はここから兄に対しての教経の優位、武人としての強さの強調を読み取っておられるが、ここではむしろ、『覚一本』における通盛にとつての弟・教経の存在感の大きさ、彼ら兄弟の強いつながりを見出したい。教経はこの場にいらないにも拘らず、ここでもやはり通盛と教経という兄弟として姿を見せるのである。

*

以上見てきたように、教経と兄通盛は共に描かれ、兄と弟として焦点化されながら描き出されているといつてよい。

そしてそのような強いつながりで結ばれた兄通盛の死を経て教経のもとに來た菊王は、教経にとつてはその亡き兄の忘れ形見であり、兄の死後において何にも代えがたい存在であつたのではないだろうか。

さらに言えば、「菊」を冠する「菊王」という名前から、菊王がおそらくは通盛の同性愛の相手であつたことが推察される（注9）。通盛亡き後、教経の相手ともなつたのだろう。その意味では、教経は菊王を介して亡き兄とのつながりを確認し続けていたのではなからうか。菊王は亡き通盛と教経を結ぶ、何にも代えがたい存在であつた。

だからこそ、教経は射抜かれた菊王を見て、義経を前に戦闘を中断してまでも、駆け寄らずにはいられなかつたのである。

四、首を守る

菊王の討死をめぐる本場面で、最も注目したいのが「首」である。射られた嗣信、その首を獲ろうと走り寄る菊王、「兄が頸をとらせじ」と矢を放つ忠信、菊王のもとに駆け寄る教経——本場面での彼らのやりとりが首をめぐる繰り広げられていることに着目したい。

菊王のもとに駆け寄つた教経に関しては、首に関する直接的な記述は見えないが（例えば「菊王が頸をとらせじ」など）、

かたきに頸はとられねども、いた手なれば死ににけり。

（②巻十一「嗣信最期」三五三頁）

と語られる箇所に、菊王の首に対する教経の意識を見出すことができるのではないだろうか。菊王は大将軍などとは違い、たとえ首を討ち取られようと敵方にとつてその首に特別な価値があるというわけではないはずである。身分の低い、ただの童に過ぎない人物なのだ。そうであるならば、例えば「舟へからりと投げられたれば、いた手なれば死ににけり。」などというように、その死を語れば十分のはずである。それを敢えて、「かたきに頸はとられねども」と語られることの意味は何なのか。

それは負傷した菊王の体を船に投げ入れた、教経にとつての問題意識に他ならないのではないだろうか。すなわち、教経は単に菊王を助けようと駆け寄つた、というよりも、その首を守るための行動であつた、首を守ることに執着したのだと考えられるのではないだろうか。だからこそ、「かたきに頸はとられねども」——教経は、菊王を自軍の船に投げ入れることで敵から首を守ること

ができたけれども、痛手だったので死んでしまったのだ、と語られるのである。

『寛一本』における教経のこのようなあり方は、『屋代本』『百二十句本』『源平盛衰記』に明確に顕れている。

『屋代本』

能登前司見之、菊王丸力頸ヲ敵ニ取セシト、舟ヨリ飛テ下、菊王ヲ提テ船へ乗給フ。

『百二十句本』

「敵に首を取らせじ」と、能登の前司、船より飛んでおり、菊王をひつさげて船に乗り給ふ。

『源平盛衰記』

能登守、童が首を取られじと、太刀を打振りつとより、童が手を取り引き立てて、曳声を出だして船に抛げ入る。

『四部合戦状本』

主の射落としたる敵の首を取らんとて、太刀を抜き、渚へ飛び下りけり。佐藤四郎兵衛、「兄を討たせじ」とて、吉く引き、童が腹巻の引合を健かに射ければ、大居に並びぬ。能登守、「童を討たせじ」とて、渚へ飛び下りたまふ。能登守、「童を討たせじ」とて、渚へ飛び下りたまふ。

『長門本』

四郎兵衛、菊王丸かくひをとらむと、おちあひけるを、能登守、さしこして、大かたなをぬきて、

※『延慶本』には該当箇所なし。

二重傍線部に示したように、『屋代本』においては「能登前司見

之、菊王丸力頸ヲ敵ニ取セシト」、「百二十句本」においては「敵に首を取らせじ」と、能登の前司、そして『源平盛衰記』においては「能登守、童が首を取られじ」と、これらの諸本においては教経の行動の理由が首を敵に取られないこと——つまり菊王の首を守ることにあつたことが明確に示されている。

『四部合戦状本』ではこの部分が傍線部、「童を討たせじ」となっているが、その前の点線部、教経の射落とした佐藤三郎兵衛嗣信の首を取ろうとした菊王に対して佐藤四郎兵衛忠信が「兄を討たせじ」と発していることから、「討たせじ」に（首をとらせじ）の意を汲み取つてよいだろう。

また、『長門本』では波線部、「四郎兵衛、菊王丸かくひをとらむと、おちあひけるを、能登守……」と、菊王の首を取ろうと迫つた佐藤四郎兵衛を見て、教経は行動を起こしており、ここにも菊王の首に対する教経の意識を読み取つてよいと考えられる（『延慶本』はいずれの表現も持たない）。

*

以上、教経が思わず菊王のもとに駆け寄つた行動には、単に菊王を助けようとしただけでなく、その首を守ろうとした、首を敵に取られるわけにはいかなかったのだという、菊王の首に関する教経の意識・こだわりを読み取ることができであろう。そしてそれはほとんどの諸本に共通したあり方として顕れている。

先に述べたように、菊王の首は敵方にとっては所謂、〇〇將軍の首といった特別な価値があるわけではない。しかし、教経にとつては違ふのだ。教経にとつての菊王の首は特別であり、それが討ち取られたか否かが問題になるのである。教経の守ろうとした菊王の首には、教経固有の価値が付与されていると考えられる。

その固有の価値とは何か。先に確認したように、菊王は兄通盛に召し使われていた童であり、兄の死後教経に仕えるようになった、いわば通盛の死を背負った存在である。

そこで、再び通盛の最期の場面を確認したい。

越前三位通盛卿は、山手の大將軍にておはしけるが、其日の装束には赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧着て、黄河原毛なる馬に白覆輪の鞍おいて乗り給へり。内甲を射させて、敵におしへだてられ、おとと能登殿にははなれ給ひぬ。しづかならん所にて自害せんとて、東にむかつておち給ふ程に、近江国住人佐々木の木村三郎成綱、武藏国住人玉井四郎資景、かれこれ七騎がなかに取りこめられて、つひにうたれ給ひぬ。

②巻第九「落足」二四一頁

前節でも触れたが、通盛は一の谷合戦で深手を負い、自害しようとして落ちたところを源氏軍七騎に取り囲まれて討たれたのだった。その証拠に、

今度うたれ給へるむねとの人々には、越前三位通盛、弟藏人大夫業盛、薩摩守忠度、武藏守知章、備中守師盛、尾張守清定、淡路守清房、修理大夫經盛嫡子皇后宮亮經正、弟若狭守經俊・其弟大夫敦盛、以上十人とぞ聞えし。

②巻第九「落足」二四二頁

と、通盛の名は一の谷で討たれた平家主要メンバーの一人として記されている。大將軍であつた通盛の首は、勲功の証として源氏

軍の手に落ちてしまったと考えてよいだろう。

先に触れた、通盛の討死場面を詳細に語る『延慶本』『源平盛衰記』においては、その死が以下のように語られている。

《延慶本》

佐々木ガ郎等、三位ノ鎧ノ引合ヨリ太刀ヲ左右ヘ指チガヘテ、ウツヲニクリナシケレバ、三位ヨハリ給タリケルヲ頸ヲ取ル。佐々木ガ郎ハナカラ計ソ切タリケル。佐々木ヲキアガリテ、三位ノ頸右ノ手ニサゲテ、弓杖ツキテ、フトコロヨリタ、ウ紙ヲ取出シテ、頸ノ血ヲノゴフ。…(中略)…宮太滝口時員ト云侍、三位ノ跡ヲ尋テ追テ参リケレドモ追ツカズ。三位被打給テ後、追付タリケレドモ、頸ハナシ。

《源平盛衰記》

源三刀を抜き、三位を二刀刺す。刺されて弱り給ひけるを、力を入れて跳ね返し、起しも立てずやがて三位の首を取る。この間に源三が郎等二人、三位の侍三騎、互に主を争みてここに五人亡びにけり。源三、三位の首を取り、郎等に、「項の重きはいかに」と問ふ。三位の刀を取りて見れば、鞘ながら掻きたれば、鞘尻二寸ばかり碎けて、刀の鋒二寸入りて、その創にてぞありける。源三成綱は左手にて領ささへ、右の手に首を捧げて陣に帰る。ゆゆしくぞ見えたりける。

『延慶本』では「三位ヨハリ給タリケルヲ頸ヲ取ル。」と、また『源平盛衰記』では「刺されて弱り給ひけるを、力を入れて跳ね返し、起しも立てずやがて三位の首を取る。」と、通盛の首が討ち取られたことが明記されている点が注目される。『源平盛衰記』に

おいてはさらに、「右の手に首を捧げて陣に帰る。」と、その首が源氏方の陣営に届けられたことが語られている。これら二本では通盛の首の行方が記されるのである。

一方、『延慶本』『源平盛衰記』などのように、「通盛の首がとられた」「首が源氏軍に届けられた」などの直接的な表現は見受けられない『寛一本』だが、いずれにせよ、討たれた通盛は大将軍である。大将軍通盛の首は源氏軍の手に落ちてしまったと考えてよいだろう。そうして討ち取られた平氏方の首は、

寿永三年二月七日、摂津国一の谷にてうたれし平氏の頸共、十二日都へいる。平家にむすぼれたる人々は、わが方さまにいかなるうき目を見むずらんと、なげきあひかなしみあへり。

②巻第十「首渡」二五七頁

と、都へ届けられることとなる。

物語において、これら一の谷合戦で討ち取られた平氏方の首は特別である。なぜなら、都に届けられた彼らの首は、平氏一門の中で初めて大路を渡され、獄門に懸けられてしまうからだ。

同十三日、大夫判官仲頼、六条河原に出でむかつて頸共うけとる。③東洞院の大路を北へわたして、獄門の木にかけらるべきよし、蒲冠者範頼、九郎冠者義経奏聞す。法皇、此条いかがあるべからむと、おぼしめしわづらひて、太政大臣、左右の大臣、内大臣、堀河大納言忠親卿に仰せあはせらる。④五人の公卿申されけるは、「昔より卿相の位にのぼる者の頸、大路をわたさるる事先例なし。就中此輩は先帝の御時、威里

の臣として久しく朝家につかうまつる。範頼、義経が申状、あながち御許容あるべからず」と、おの／＼一同に申されければ、わたさるべきまじきにてありけるを、範頼、義経かさねて奏聞しけるは、：

②巻第十「首渡」二五七～二五八頁

この首渡しは傍線部①に見えるように、義経と範頼の後白河法皇に対する強い要求によつて実現する。しかし、公卿の位を有する者を晒し首にすることは先例がない、まして平氏は先帝・安徳天皇の外戚である。そのため法皇のそばに仕える公卿たちは、傍線部②のように、当初激しく反対する。にも拘わらず義経らの度重なる要求に、法皇は従わざるをえず、

兩人頻りにうったへ申す間、法皇力およばせ給はで、終にわたされけり。見る人いくらといふ数を知らず。帝闕に袖をつらねしいにしへは、おちおそるる輩おほかりき。巷に首をわたさるる今はあはれみかなしまずといふ事なし。

②巻第十「首渡」二五八～二五九頁

のように、先例は破られることとなる。首は京中に晒されてしまうのである。平氏が朝敵として裁かれるべき存在となったことが公に示された、一門にとつて衝撃的な出来事であったといえるであらう。

さらに言えばこの出来事は、二重傍線部、「帝闕に袖をつらねしいにしへは、おちおそるる輩おほかりき。巷に首をわたさるる今はあはれみかなしまずといふ事なし。」と語られる。かつて朝廷に仕え、さらに天皇の外戚となつて榮華を極めた平家一門の首が、

大路を渡され獄門に懸けられる「今」——この「今」が、諸行無常・盛者必衰のあらわれとして語られ、首渡しは平家滅亡を語る物語の、一つの転換点として、大きな動揺をもたらすのである。

朝敵として裁かれるべき存在となったことが明確に示されたとあって、平氏一門に大きな衝撃を与えた首渡しだったが、そこで晒された首の中には、一の谷で討ち取られたあの通盛の首も当然含まれていたと考えてよいだろう。

また、これら平氏の首が京中を渡されたというニュースは、教経のいる八島の平家一門の人々の耳にも届けられていたと考えてよい。教経と同じく八島の館に身を置いていた平維盛のセリフが、そのことを物語っている。

さる程に、小松の三位中将維盛卿は、身がらは八島にありながら、心は都へかよはれけり。故郷に留めおき給ひし北の方、をさなき人々の面影のみ、身にたちそひて、忘るるひまもなかりければ、「あるにかひなきわが身かな」とて、元暦元年三月十五日の暁、しのびつつ屋島の館をまぎれ出でて、与三兵衛重景、石童丸と云う童、船に心得たればとて武里と申す舍人、是等三人を召し具して、阿波国結城の浦より小船に乗り、鳴戸浦を漕ぎとほり、紀伊路へおもむき給ひけり。…(中略)：「是より山づたひに都へのぼつて、恋しき人々を今一度見もし見えばやとは思へども、本三位中将の生取にせられて大路をわたされ、京鎌倉、恥をさらすだに口惜しきに、此身さへとはられて、父のかばねに血をあやさん事も心憂し」とて、

②巻第十「横笛」二九五〜二九六頁

維盛は館を後にする際、「本三位中将の生取にせられて大路をわたされ、京鎌倉、恥をさらすだに口惜しきに」ともらしているのである。

この「本三位中将の生取にせられて大路をわたされ」とは、あの首渡しの翌日に行われた平重衡の引き回しのことを指す(注10)。つまり、一の谷で生捕りにされた重衡の大路渡しが八島にいる維盛の耳に届いているのである。都での重衡の大路渡しは八島の平家一門の人々のもとにも伝わっていると考えてよいであろう。そして同じく八島の館にいる教経の耳にも、重衡の一件は当然伝わっているはずだ。

であるとすれば、その前日に行われた首渡しのことも同様に伝わっていると考えるのが自然ではないだろうか。教経は、一の谷で討たれた一門の人々の首が、なかでも兄通盛の首が京中を晒されたことを知っていたと考えられるのである。

教経は、諸国が次々と源氏になびき弱気になる平家一門の人々の中で、一切迷いや躊躇を見せず奮戦してきた人物である。彼は、もはや止められそうもない一門滅亡の流れを、一人食い止めようとするかのように、ただただ合戦に身を投じてきたといえるだろう。そんな教経にとって、一の谷で討たれた平氏の首が京中に晒された、この首渡しは、彼が守ろうとしてきた平氏の家の存在を大きく傷つけられる出来事だったはずである。

そしてそのこと以上に教経に衝撃を与えたのは、その晒された首の中に特別強いつながりで結ばれた兄通盛が含まれていたという事実であつたらう。教経は兄通盛を失っただけではなく、その首が源氏方の手に落ち、晒し首にされるという屈辱を受けたことを知ったのである。

*

菊王の討たれた場面に話を戻そう。以上見てきたように、菊王は教経にとって特別強いつながりを持った亡き兄の忘れ形見であり、何にも代えがたい特別な存在であったと考えられる。さらに一の谷で討たれた兄通盛の首は、公卿であり天皇の外戚であった平家の首が初めて、それも源氏方の要求によって京中に晒された首渡しにおいて、共に並べられるという屈辱的な扱いを受けていた。それを知った教経の心中はどれほどであったろうか。

以上のことを考え合わせると、「嗣信最期」で敵の矢に射抜かれた菊王が、教経にとって兄通盛を背負った存在として、そしてその兄が討たれた一の谷合戦での敗戦と首渡しを背負った存在として顯れてくる。

そんな菊王が射抜かれたのを見た教経は、思わず駆け寄らずにはいられなかったであろう。宿敵である義経の前に戦いを中断してまでも、教経は菊王の首を断じて源氏方に渡すわけにはいかなかったからだ。

すなわち、能登殿にとつての菊王は、一の谷で討たれ無惨にも晒し首にされた兄通盛に代えて、何としても自らの手で守り通したい存在であり、その首を守ることしかつて守れなかった兄の首を守ることだったのではないだろうか。その強い想いが教経を動かしたのである。勇猛果敢が常である教経が戦を忘れた、最初で最後の瞬間であつた。

教経の並々ならぬ想いの深さは、「この童うたせてあまりにあはれに思はれければ、其後はいくさもし給はず。」の一文に集約されている。ここには、宗盛の要請に「さ承り候ひぬ」(②巻十一「嗣信最期」三五二頁)と頼もしく応え、「舟軍は様ある物ぞ」(②巻

十一「嗣信最期」三五二頁)と勇ましく言い放っていた教経はもういない。あれほどまでに猛々しかった武将教経が戦意喪失に陥ってしまうという描写は、菊王の死がどれほどの衝撃を彼に与えたかを物語っているといえるであろう。

教経は、このとき再び通盛を失ったのだ。その衝撃が平家きつての武将教経の戦意を奪ったのである。

ちなみに少し話は逸れるが、この教経の戦意喪失については諸本間で興味深い異同が見受けられる。諸本の該当箇所を以下に示す。

《屋代本》

指モ不便ニシ給シ菊王討セテ、能登前司其後軍モシ給ハス。

《百二十句本》

さしも不便にし給ひし菊王を射させ、そののちはいくさもし給はず。

《長門本》

いたておひたるものを、つよくなけられて、なしかは、たすかるへき。やかて舟のそこにて、しにけり。

《源平盛衰記》

暫しは生くべくやありけんに、余りに強く投げられて、後事もせず死にけり。

※『四部合戦状本』『延慶本』には、該当箇所なし。

『屋代本』『百二十句本』には『覚一本』と同様、菊王を失った教経の悲しみと戦意喪失が見られる。その一方『長門本』と『源平盛衰記』には興味深い異同が見受けられる。

すなわち、『長門本』では負傷した菊王を自軍の船に投げ入れた教経の行動が、菊王の致命傷になったかのように語られているのである。また、『源平盛衰記』でも、教経の行為が菊王の死期を早める致命傷となったかのように、やや批判的に語られている。両者とも菊王を亡くした教経の悲しみや戦意喪失記事はなく、だからこそ、このような『寛一本』他とは全く異なる在り様を示しているのだろう。

五、兄を失った二人の弟

菊王の死を受けて呆然となった教経の姿が描かれた後、本章段ではもう一つの死が語られる。すなわち、章段名ともなっている佐藤三郎兵衛嗣信の死である。教経の矢によって瀕死の重傷を負った嗣信は陣の後ろに運ばれ、主君義経に見守られながら最期のときを迎える。

判官は佐藤三郎兵衛を陣のうしろへかきいれさせ、馬よりおり、手をとらへて、「三郎兵衛、いかゞおぼゆる」との給へば、いきのしたに申けるは、「いまはかうと存候」。「おもひをく事はなきか」との給へば、…（中略）…ただよわりによわりにければ、判官涙をはらくとながし、「此辺にたつき僧やある」とて、たづねいだし、「手負のただいまおちいるに、一日経書いてとぶらへ」とて、黒き馬のふとうたくましいに、黄覆輪の鞍おいて、かの僧にたびにけり。判官五位尉になられし時、五位になして、大夫黒とよばれし馬なり。一の谷の鶴越をもこの馬にてぞおとされたりける。弟の四郎兵衛をはじ

めとして、これを見る兵者共みな涙をながし、「此君の御ために命をうしなはん事、まッたく露塵程も惜しからず」とぞ申しける。

（②巻十一「嗣信最期」三五五頁）

死を前にした嗣信に対する、義経の情けあふれる振る舞いが涙を誘う場面である。しかしここで注目したいのは、そんな義経の振る舞いが、嗣信の弟四郎兵衛忠信をはじめとした家臣全体の心を動かした、という末文である。忠信は兄の死を通して主君への一層の忠誠を誓い、戦闘への意欲に燃えているのである。ここで各諸本の該当箇所を見ると、以下のようなになる。

《屋代本》

兵共、「此君ノ御為ニ捨命事、不惜」ト感合テ、皆鎧ノ袖ヲソヌラシケル。

《百二十句本》

「この君の御ために命を捨てんこと、たれか惜しみたてまつるべき」と、感涙身に余り、兵どもみな鎧の袖をぞ濡らしける。

《四部合戦状本》

郎等共之を見て、「君の為に命を捨つる事、塵埃よりも軽かるべし」とぞ感じける。

《延慶本》

是ヲ見聞ケル兵共、皆涙ヲ流テ、「此殿ノ為ニハ命ヲ捨ル事不惜」トゾ各ノ申合ケル。

《長門本》

兵とも、是を見て、「此君のために、たれか命を捨さらん」と

て、涙を流しける。

《源平盛衰記》

これを聞きける兵共も鎧の袖を絞りけり。

『寛一本』の他はすべて、「兵ども」あるいは「郎等共」とあるのみで、弟の四郎兵衛忠信の名前は見えない。『寛一本』のみが「弟の四郎兵衛をはじめとして」と、奮起する兵の筆頭に嗣信の弟忠信の名を語っているのが特徴的である。

『寛一本』はあえて「弟」と付けて四郎兵衛忠信の名を出すことで、教経と忠信という二人の弟を焦点化し、両者の対照をより鮮明に描き出そうとするのではないだろうか。そこで焦点化されるのは兄の死——能登殿の場合は兄の形見的存在の死だが——を享受する二人の弟の姿である。

すなわち、兄嗣信の死を受けた弟の忠信が戦闘への決意を新たにしたのに対し、教経は兄通盛の遺した童・菊王の死を受けて戦いをやめてしまう。両者の姿はあまりに対照的であるといつてよいだろう。嗣信の死が義経軍の一層の結束をもたらす要因として描かれたのに対して、菊王の死は平家の最大戦力である教経の戦意喪失を招いているのである。

兄の死を受けた二人の弟が、それぞれ正反対のかたちでそれを享受する。「嗣信最期」は二組の兄弟と二つの死を通して、滅亡への秒読み段階に入った平氏と、彼らを根絶やしにすべく進軍する源氏の在り方の対照をはっきりと映し出すのではないだろうか。

六、おわりに

「嗣信最期」における菊王は亡き兄通盛の遺した童であり、教経にとって何にも代えがたい存在であった。そんな菊王が射抜かれたのを見た教経は、宿敵義経を目の前にしながら戦闘を中断して菊王のもとへ走り寄る。教経を動かしたのは、一の谷で討たれ、京中を晒された兄の首への無念の想いであった。もう二度と大切な者の首を源氏方に奪われるわけにはいかなかったのである。

首は守られたものの菊王の死が与えた衝撃は大きく、教経は一旦戦いをやめてしまう（注11）。その一方でもうひとつの死——嗣信の死がもたらしたのは義経軍のさらなる結束であった。「嗣信最期」は二組の兄弟と二つの死を通して、平氏滅亡の物語の流れの中にある平氏と源氏のありかたを対照的に示すのである。

これまで、教経はその登場が合戦場面のみに限られ、また武勇の将としての造形が目立ったために、「典型化され抽象化された理想的武人像」とのみ見られがちで、その内面について「きわめて単純な存在」（注12）などと評価が下されてきた。しかし、「嗣信最期」で垣間見える教経の悲嘆は、決して見過ごすことのできないものではないだろうか。そしてそれは兄通盛との兄弟の關係性を通して表現されているのである。

通盛は決して目立つ登場人物ではない。教経とともに数々の合戦に参加し、大將軍を務めながらもその活躍が語られることはなく、弟の華々しい活躍の前にその存在はかすみがちといつてもいいくらいである。通盛はむしろ巻九「小宰相身投」の哀話の主人公・小宰相の夫としての印象が強く、合戦においては教経の武勇を際立たせる非力な兄という位置付けしかなされてこなかったよ

うに思われる。これまで通盛・教経兄弟は別々に捉えられがちであつた。

しかし巻十一「嗣信最期」においては、それ抜きでは決して読み解くことのできない、通盛と教経の兄弟の物語が確かに展開されているのである。

注

(1) 『新訂増補国史大系 吾妻鏡』(黒板勝美 国史大系編修会編)

吉川弘文館 一九六四年)

(2) 『玉葉』(九条兼実著 国書刊行会編 名著刊行会 一九七一年)

(3) 鈴木淳一「平家物語虚構の一形態——教経像をめぐって——」

『語学文学』第五号 一九六七年三月)

(4) 伊藤幸恵『平家物語』における平教経——門脇家の位置付けと対義経の構図をめぐって——『日本文芸論稿』第二二号 一九九五年二月)

(5) 本文引用は特に断りのない場合、すべて東京大学国語科研究室所蔵の『平家物語』(旧高野辰之氏所蔵。通称、高野本、覚一別本)を底本とする、『新編日本古典文学全集 平家物語①②』(小学館)の本文に拠る。引用した本文には、私に傍線や中略、補足を附した。本文の後ろには巻数・章段名・頁数を示した。

(6) その他の諸本の参照本文は以下の通りである。

・屋代本：『屋代本・高野本対照平家物語』(麻原美子 春田宣 松尾葦江編、新典社)

・百二十句本：『新潮日本古典集成 平家物語』(水原一校注、新潮社)

・四部合戦状本：『訓読四部合戦状本平家物語』(高山利弘編、有精堂)

・延慶本：『延慶本平家物語・本文篇』(北原保雄 小川栄編、勉誠社)

・長門本：『長門本平家物語の総合研究 校注篇』(麻原美子編、勉誠社)

(7) 源平盛衰記：『新定源平盛衰記』(水原一考定、新人物往来社) 業盛は、棒線部②の場面、「一門都落」で名を連ねて以降は登場せず、左記の一の谷での最期を記されて終わる。

門脇中納言教盛卿の末子藏人大夫業盛は、常陸国住人士屋五郎重行にくんでうたれ給ひぬ。

(②巻第九「知章最期」二二六頁)

一の谷の合戦に参加しつつも、通盛・教経ら兄たちとは別の場所であつたのである。

(8) 刑部久氏『平家物語』に於ける平教経像の問題——物語の教経、一谷脱出から屋島合戦以前まで——『軍記と語り物』第二二五号・一九八九年三月)

(9) 「菊」という言葉について、白洲正子は次のように指摘する。

ちなみに、「菊の契り」という言葉は、少年の肛門のかたちから出ており、「菊華の契り」とか「菊契」といえば、同性愛のことを意味した。(白洲正子『両性具有の美』二〇〇三年三月 新潮社 二三頁)

菊王は「菊」という男色のメタファーを背負う存在であり、教経との濃厚な男色関係が暗に示されているのである。

(10) 同十四日、いけどり本三位中将重衡卿、六条を東へわたされけり。(巻第十「内裏女房」二六二頁)

(11) 本場面における八島合戦では戦うのをやめてしまった教経だが、続く壇ノ浦合戦においては再びその武勇を発揮する。

(12) 杉本圭三郎氏(「能登守教経をめぐって」『平家物語の人物像』――『日本文学誌要』第三〇号 一九八四年八月)の論文中の以下の言及による。

たしかに教経は勇猛果敢な武人としての行動性に貫かれた人物としての形象の典型ではあるが、その内面性をうかがわせる叙述はなく、知盛像に比較すればきわめて単純な存在ということになろう。

(はせがわ・やすこ／東京学芸大学大学院修士課程)